

【夜編】

段ボールに荷物を詰めているイーリス。
資料やら、なにやら。
そこに現れるエレ。手には白衣。

エレ 「何か手伝おうか？」

イーリス 「あ、いえ。大丈夫です。そんなに荷物多くないんで」

エレ 「そうか」

イーリス 「所長はちゃんと行きました？」

エレ 「ああ。途中で逃げ出してなきや、な」

イーリス 「笑」なんであんなに検査嫌がるんだか」

エレ 「注射、嫌いなんだってさ」

イーリス 「…ああ。なんか納得(笑)」

イーリス、段ボールを一つ外へ運び出す。

荷物の中に、あるノートを発見するエレ。

エレ 「(ばらばらとめくり読む) …『…図書館の利用時間を延長できないか所長に交渉。

…ピアノ以外の楽器の申請…。ノクト、やはり人参を残すと報告あり。明日は必ず食べさせるぞ…』」

イーリス 「ちよっ!! 何勝手に読んでるんですか!!」(取り上げる)

エレ 「……(じーっと見る)」

イーリス 「いや、謝るとかないわけ？」

エレ 「実に優秀な管理人だなと思ってね」

イーリス 「…はあ？」

エレ 「ま、割り切ることは全くできてなかったけど」

イーリス 「…所長には、昔のあなたを思い出すって言われましたよ？」

エレ 「俺も言われたよ(笑)」

ため息をついて、荷物の整理を続けるイーリス。

荷物の中に(チップの入った)封筒を見つけるエレ。

エレ 「…これ」

イーリス 「所長が饞別にくれました。(受け取って) どうしてこれが饞別になるんだか(笑)」

エレ 「…みんな、元気なのか？」

イーリス 「え？」

エレ 「連絡取り合ってるんだろ？」

イーリス 「まあ、アルバとオーブには仕事を続けてもらってますからね。むしろ、前よりも積極

的にプロジェクトを支えてもらってる」

エレ 「そうだな」

イーリス 「最近アルバが開発したチップの話しましたっけ？」

エレ 「いや」

イーリス 「すごいんですよ。チップの中に…」

ブザーの音。

白衣を手にするイーリス。

エレ 「俺一人で大丈夫だ」

イーリス 「でも…」

エレ 「どちらにせよ明日からは俺一人だ」

イーリス 「そうですね。じゃあ、お願いします」

行こうとするエレ。

イーリス 「あの、お世話になりました」

エレ 「まだ一日あるでしょ？」

イーリス 「(笑)」

白衣を纏いながら出ていくエレ。

残されたイーリス。ふと、ノートを手にしてはらとめくる。

イーリス 「(読む)『：配属初日。保険担当医のエレさんからA B Oについて、説明を受ける。
ここで大事なことは：割り切ること』」

彼らを思い出す、イーリス――。

【夜M1】 選ばれた者 生かされる場所

A B O たちが登場。

イーリス 「初めてみた彼らは……」

規則正しい生活、ルールの中で生きているA B Oたち。
(ノートを読んでいるイーリスは時間軸が違う)

A B O たち

何一つ 不自由なく

何一つ 恐れることなく

何一つ 疑わず

起きる 学ぶ 食べる 眠る 生きる
 何一つ 不自由なく
 何一つ 恐れることなく
 何一つ 疑わず
 起きる 学ぶ 食べる 眠る 生きる

僕（俺・私）たちはABO ——選ばれた者
 ここはアーク ——生かされる場所

そこにムスタが現れる。（ABOたちはストップ）

ムスタ 「荷造り、進んでる？」

イーリス 「所長。…検査は」

ムスタ 「行ったよう。ちゃ・ん・と！」

イーリス 「なら、よかった」

ムスタ 「それ、日誌？」

イーリス 「はい。…懐かしくてつい読みふけてました」

ムスタ 「荷造りあるあるだね」

イーリス 「所長。…餞別に教えてください」

ムスタ 「何を？」

イーリス 「俺がここに配属される前の…この【第17アーク】のこと」

ムスタ 「…彼らのこと？」

イーリス 「はい」

突如始まるオープニング。

【夜M2】 Re:trigger

欲しいものはナニ？

聞かないで 聞かないで

与えてくれないなら聞かないで

ここにいるイミ

知らない 知らない

教えて欲しくもない 黙ってよ

産声を上げたのがハジマリ

僕も俺も君もあなたも

吸い込んだ空気

眩しすぎる光
 生きる絶望を知って
 泣いたんだ

この船に 乗せたいのは…ダレ？
 オレじゃない キミじゃない /ダレ？
 来るかもわからない大洪水
 この船で 救いたいのは…ナニ？
 ララバイ ララバイ
 レクイエムにも似ている 子守歌

Re:trigger

終わりは始まりの合図

Re:trigger

引き金は君の手の――ナカ

(これ以降、語るムスタと聞いているイーリスが常に舞台上のどこかで見ている予定)

ムスタ 「この【第17アーク】ができた頃にやっと、管理制度が整い始めたんだよ」

イーリス 「性別や年齢別にアークをカテゴリー化するようになったんですよね？」

ムスタ 「それだけじゃない」

イーリス 「…あ、(自分のこめかみを指して) チップ…?」

ムスタ 「そう。最初はA B Oであることの刻印のみだったのが、チップが埋め込まれ、A B Oの状態をより正確に、安全に管理することが可能になった」

イーリス 「…ここができた時にエレと所長は一緒に配属になったと聞きました」

ムスタ 「エレ君がいなかったら僕は辞めていたかもなあ」

イーリス 「え？」

ムスタ 「このアークでの最初の deluge が…、なかなか厳しい実験だね。多くのA B O達が犠牲になった…」

ユオが一人、佇んでいる。

ムスタ 「初期メンバーで生き残ったのは、彼だけだ」

イーリス 「……」

ムスタ 「間もなく、オーバー20の成人男性のみを収容することになった第17に、他のアークからA B O達がやってきた」

リールがやってくる。

リール 「君がユオ？ 僕はリール。よろしく」
ユオ 「…どうも」

リール 「図書館って…どこにあるかな？」

ユオ 「職員棟の手前」

リール 「…えっと…」

ユオ 「あそこに見える棟の一番の奥」

リール 「ありがとう」

ユオ 「…本、好きなん？」

リール 「うん」

ホク 「あー！ リールこんなところにいた」

リール 「ホク」

ホク 「ノクト！ いたよ！」

ノクト 「リール、図書館あっちだって…（ユオに気づいて軽く会釈）」

ホク 「えっと…（名前を思い出せない）」

リール 「ユオ」

ホク 「そうだ！ユオ！ 俺はホク。こっちはノクト！ よろしく！」

ユオ 「どうも」

ホク 「？ どうも（イントネーションを真似る）？」

ユオ 「あ、訛り？」

リール 「独特だよね」

ユオ 「そうなんかな？ 俺が昔おったアークの管理人やった人がこの訛りやってん。やから
いつの間にかしみついてもうたんやろうな」

ホク 「そうなんだ」

ユオ 「ほら、休憩時間なくなつてまうで？」

リール 「そうだ。…ありがとう」

図書館へ向かうリール。

ノクト 「俺たちも行こーぜ、ホク」

ホク 「うん！」

ユオから離れるノクト、ホク。

ホクの足が止まる。

【夜M3】 よるのはなし

ユオはやはり、一人佇んでいる。

ノクト 「ホク？」

ホク 「…ユオと同じ訛りの人、他に誰もいないね」

ノクト 「……」
ホク 「あ、なんかごめ」
ノクト 「行こうぜ」
ホク 「……うん」

二人、去る。

ユオ

夜は必ず明けるなんて嘘
明けない夜だってある
光の射し込まない朝もある

点在するリール、ホク、ノクト、ノーチ、ライラ。

ABOたち

太陽を知らない檻の中で見る夢は
決して叶うことはないんだ

別空間のエレが告げる。

エレ 「明日からの実験期間に向けて各自しっかり休むように」
ABO 「……」

リールは、一礼して去っていく。
そわそわと落ち着きのないホク、逃げるように去っていく。

ノクト 「ホク!!」(追おうとする)
ユオ 「大丈夫やで」
ノクト 「え？」
ユオ 「夕食…いつも通りのメニューやったから」
ノクト 「だから何だよ」
ユオ 「明日からの実験は、そんなきつくはないはず」
ノクト 「…だとしても不安なのは不安だろ？」
ユオ 「弟みたいなんや？」
ノクト 「んなのわかんねーよ。兄弟とか知らねーし。でも、ホクとはずっと一緒だったからさ」
ユオ 「仲ええんやね」
ノクト 「……」(睨む)

ノクト、ホクを追って去る。
残っているのはノーチ、ライラ、ユオ。

ユオは二人に話しかけるように、でも、それは独り言のようでもあり…。

7

ユオ 「仲ようなくても、後でしんどいだけやんなあ？」

ユオ、去ろうとする。

ノーチ 「…って、言えばよかったんじゃない？」

ライラ 「……」

ユオ 「(足を止める)…直接？ そんなん酷やん」

ノーチ 「初期で生き残ったの、あんただけなんだってな」

ライラ 「ノーチ」

ユオ 「(笑)一番の年下君はなかなかになかなかやね」

ノーチ 「なんだよそれ」

ユオ 「褒め言葉やで」

ノーチ 「チッ…」

ノーチ、去る。

ライラ 「わるぎはないんだよ？」

ユオ 「(笑)知ってる…」

ライラ 「みんな、ふあんなだけなんだ」

ユオ 「夜はいつ明けるんやろ…」

ライラ 「……」

【夜M4】 よるのはなし M1_{top}

点在するABOたち。

ABO

夜は必ず明けるなんて嘘

明けない夜しか知らない

ここにいたら ここにいたら…

僕(俺・私)たちはABO ——選ばれた者

ここはアーク

ムスタ・イーリス——彼らを

イーリス ……生かす場所

場面が、語っているムスタと聞いているイーリスへ。

8

ムスタ 「そんな【第17アーク】に、彼らがやってきた…」
イーリス 「…彼ら…」

出てくるアルバ、オーブ。そして…ノア。
ノア、うやうやしく礼をして、

ノア 「研究員としてここに配属になりました。ノアです。よろしくお願いします」

ムスタ 「ちょうど僕が君を面接したのはその頃だ。ここからは、まあ、君も知ってるよね？」
イーリス 「…はい」

ムスタ 「最初に風穴を開けたのは…君だよ」

イーリス 「え？」

ムスタ 「君だよ」

イーリス 「……」

ムスタ 「エレ君は戸惑ってたみたいだけど、僕は…、不謹慎だけどワクワクしたなあ。何かが
始まりそうで」

イーリス、思い出す――。

回想。

イーリス 「あの！」

【夜M5】 Day by Day ―～＝

ムスタ 「学習計画の改定案？」

A B O Day by Day…

イーリス 「はい。これまでのカリキュラムはとても閉鎖的です。

もっと外のことを学ぶべきです」

ムスタ 「彼らが外に出ることは」

イーリス 「ある、かもしれないでしょう？」

ムスタ 「……」

A B O Day after Day…

エレ 「遠足??」

イーリス 「もちろん森からは出ません。もともと人里からは隔離されてるし、塀の外
にちょっと出たところで危険はないはず」

エレ 「それはそうだけど」

イーリス 「彼らが逃げるかも？」

エレ 「……」

イーリス「聞き分けのいいイイ子たちなら、大丈夫ですよ」

A B O たち Day by Day！

ムスタ 音がする

エレ 確かに聞こえる

ムスタ・エレ 何かが変わる音

ムスタ 繰り返しの日々 A B O Day after Day…

エレ 代り映えしない日々

ムスタ・エレ そんな Day after Day…

味気ない

日々だったけど…？

曲調が変わる。

A B O たち Day by Day！

音がしたんだ

何の音？

何かが崩れて

風が通る音

誰が空けた？ ムスタ・エレ Day by Day

小さな風穴

イーリス ここにいたままじゃ

何も知らないまま

ムスタ 「そして…新しい風穴を開けたのは彼だ」

ナイトが登場。

A B O たち Day by Day！

音がしたんだ

何の音？

世界が色づいて

風が染まる音

誰が空けた？ イーリス・ムスタ・エレ Day by Day…

新たな風穴

A B O たち Day by Day！

ナイト 音立って…こうぜ

ABOたち

確かに生きてる

その証を叫べ

回想が終わる。(ABOたち去る)

ムスタ 「…懐かしいね」

イーリス 「はい」

エレがやってくる。

エレ 「ムスタ所長、帰ってたんですね。検査は」

ムスタ 「行ったよ。ちゃ・ん・と」

エレ 「(疑いの目)」

ムスタ 「本当だって。…どこまで僕は信用ないんだ」

エレ 「おや？ 荷造り全然進んでないな」

イーリス 「あ…、その…。ちよつと昔話を」

そそくさと荷造りを再開するイーリス。

エレ 「昔話？」

ムスタ 「そう。餞別にね」

エレ 「餞別…」

イーリスは、段ボールを運んではける。

鳴り響く着信音。浮かび上がったのは…

ムスタ 「おや、ノア君久しぶり」

オーブ 「ノンノン！ 今はねえ、リヒト君！」

ムスタ 「ああ、そうでしたね。ちょうど君たちの話をしていたんですよ」

リヒト 「どうせ、ろくでもねー話だろ」

オーブ 「えー？ もしかして悪口？」

ムスタ 「昔話ですよ。ところで、急にどうしたんです？」

オーブ 「のっぽ君が自分探しの旅に出ちゃうって聞いたから」

アルバ 「本部への異動だ。Z.A.アーベントの補佐につくって…、説明しただろ」

オーブ 「なんか久々に顔見たいな…ってリヒト君が」

リヒト 「はあ？ んなこと言ってるねーだろ」

オーブ 「珍しく気にしてたじゃんよお」

リヒト 「してねー」

オーブ 「してたー！！」(揉める)

アルバ 「お前らやめろ」

ムスタ 「元気そうでなにより」

リヒト 「あんたも元気そうだな」

ムスタ 「検査行かないと怒られますから(笑)：他のみんなも元気ですか？」

リヒト 「さあな」

オーブ 「みんな元気だよ。リヒト君がしょっちゅう気にしてるから、アルバがこまめに連絡取ってくれてるの」

リヒト 「適切なこと言ってるじゃねーぞ：っぐ」

オーブ 「恥ずかしがらないの」(リヒトの口をウサギでふさぐ)

エレ 「ナイトは？：元気か？」

オーブ 「あれえ？ まだ着いてない？」

エレ・ムスタ 「え？」

アルバ 「開発中のチップの試作品ができて、イーリスに送るって話をしたら」

オーブ 「んじゃ俺が届けるー！！って走って行っちゃったんだけど？」

リヒト 「あいつ、方向音痴だからな：」

オーブ 「アークに侵入させるときも、迷いに迷って森の中でぶっ倒れてたしね」

アルバ 「とにかく：間もなくそちにナイトが」

そこにナイト背負ったイーリス登場。

イーリス 「所長：、エレ：」

エレ 「ナイト！！」

ナイト 「：腹：減って：死にそう：。なんか食わせ：ろ：」

イーリスの背中で気を失うナイト。を、支えるエレ。

【夜M6】 Judgment Day〜その光の名は自由

イーリスとリヒトの会話。(周りはストップor散っていく)

リヒト 「本部へ異動ってことはエリート街道まっしぐらってやつ？」

イーリス 「：自分で、志願したんですよ。あの人の補佐をしたいって」

リヒト 「物好きだねえ」

イーリス 「噂で聞いたんですけど、外へ出たABO達を保護する組織が立ち上がったそうですね。

その名もノアプロジェクト」

リヒト 「へえ」

イーリス 「ご存知ないですか？」

リヒト 「さあな。：でも、いい名前じゃねーの」

イーリス 「え？」

リヒト 「知ってるか？ ノアって、『自由』って意味があんだぜ？」

*

Judgment Day…

光を知らなかった

Judgment Day…

黒い雲に覆われて

Day by Day

A B O たち

雨が洗い流す 見えない恐怖

雨が消し去る 抗えない運命

夜が明ける

その時は今

射し込む光

その光の名は

自由

まばゆい光が差し込む。

暗転。